

[091] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10175>

出版情報：語文研究. 91, 2001-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

海老井英次著

『開化・恋愛・東京——漱石・龍之介——』

本書には、昭和六十一年から平成六年にかけて「文学論輯」「紋説」などに発表された夏目漱石と芥川龍之介の作品に関する著者の論文が収録されており、その内容は次の通り。

「三四郎」論——美禰子・その絵画的造型について／一、
ヘタブラ・ラサの男／二、「アンコンシヤス・ヒポクリット」の女・美禰子／三、「白紙」と「森の女」
「三四郎」論二——東京・「集まり」の人々／一、三四郎の上京／二、東京の哲学者——広田先生／「東京」の科学者——野々宮宗八／「東京」の漂泊者——佐々木与次郎／「東京」の女学生——野々宮よし子

「それから」論——二つの「悪戯」を視座として／一、代助の「心臓」——意識化と「悪戯」／二、特殊人としての代助の自負／三、三千代との再会／四、代助の変調／五、三千代の意味「自然な女」／六、敵対するものとしての社会

「門」論——「罪」の揺曳・「信頼」のゆらぎ／一、「護謄風船の達磨」——必要十分な二人／二、小六の出現

——社会的関係の復元／三、易者と御米——一人の問題の確認／四、宗助と老師——「信頼」と「信仰」

「文明開化」と大正の空無性

《開化記物》の中の「文明開化」

鹿鳴館・そのイメージの輪舞／一、「文明開化」の殿堂

——草創期の鹿鳴館／二、鹿鳴館のかげり——明治二十年代の激動の中で／三、大正期の鹿鳴館——芥川龍之介「舞踏会」を中心に／四、三島由紀夫「鹿鳴館」——ロマンの館

芥川龍之介の「不可思議なギリシア」／一、「若き日の仏陀」とイエス／二、ゴッホ、茂吉、龍之介を貫くもの／三、「神性」と「人間性」の未分化／四、「不可思議なギリシア」

「あとがき」で語られるように、著者の意図は、「開化・恋愛・東京」をキーワードに作品を読み解き、漱石と龍之介、両者の「眼がネガティブに見ていた〈近代〉の向こうに」、「明治二十年前後の混沌とした「和洋折衷」時代」を、「ポジ（陽画）」として見出そうとするところにあり、作品の中に描かれた〈近代〉の様相とそれに対する作者の視線とが、当時の様々な資料も用いて懇切丁寧に解説されている。

（平成十三年三月 おうふう A5判 二四七頁 二、八〇〇円）

花田俊典 著

『太宰治のレクチュール』

「太宰治の文体にのせられて、彼の文章をただ恣意的に取り出して切り貼りし、いわゆる彼の理解者・共鳴者・代弁者よろしくパラフレーズしているだけに思われた」というのが、「二〇年近く前」、当時の太宰治論の多くにたいして本書の著者がおぼえた不満であった。そこで「太宰治の文体にあやつられずに彼の作品を読むためにはどうしたらいいだろうと模索し、ふと思いついたのが、いっそ注釈というかたちでまるごと読んでみようという方法だった」という。本書は、その「方法」を実践した労作である。

「方法」実践の対象に選ばれたのは、次の四作品。

「思ひ出」

「魚服記」

「東京八景」

「カチカチ山」

そして巻末に

「太宰治のレクチュール いわゆる後記ふう」

と題する一文を置く。

各篇は、はじめ九州大学教養部の紀要「文学論輯」や「文献探究」等に、いずれも「太宰治私注・稿」の副題を付して登場、そのうち「東京八景」はさらに増補改稿されて、著者

が編集実務を仕切る「紋説」に掲載された。

本書の「注釈」が、事物の事典的解説や平板な辞書的語釈を旨とするものでないことはいうまでもない。その抱負、あるいは野心は「レクチュール」と銘打った書名にあきらかである。

「この一連の注釈（あるいは評釈）は楽しい作業であった」と著者がいうように、「私的解釈もふんだんに盛り込んで、注釈の快楽に身をまかせ」た「注釈」は、著者自身「玩物喪志」というほどの苦心の蒐集になる文献資料、写真、図版等およそ百五十点を併せて、本書の読者にとっても、また「楽しい」。

（平成十三年三月 双文社出版 A5判 四〇一頁 五、六〇〇円）

井上敏幸・上野洋三・西田耕三編

『元禄文学を学ぶ人のために』

幕初から元禄にいたる、近世前期の文学研究は、井原西鶴の浮世草子・近松門左衛門の浄瑠璃・松尾芭蕉の俳諧など、この期に鼎立したいわゆる元禄「三文豪」を努めて評価すること、一応の蓄積と到達とを得た。例えば『講座元禄の文学』（平成四年 勉誠社 全五巻）のような、叢書の出刊は、そのことを示して余りない。しかし「三文豪」をあまりに無

批判に、あまりに不動のものとして評価するがために、研究の現状には、ある種の閉塞感、あるいは固定化が見られるのではないか。

本書の編集意図は、まさしくこの点にあると言ってよい。

この現状を打開するために、換言すれば、「三文豪」という固定観念から脱却し、柔軟でかつ時代に即した文学研究を目指すために、文化・学芸・思想といった、文学を産み出す隣接領域を広く見据え、元禄という時代性そのものを問い直す。本書に収められた諸論からは、そうした確固たる認識が一貫して窺われる。

構成は、この期の文学を如何に見定めるべきかを論じた、井上敏幸「総論 元禄文学を学ぶ人のために」を巻頭に置き、以下、十篇の各論および巻末付録を配する。

- | | | |
|-----|-------------------|------|
| 第一章 | 和歌文学「柳沢吉保と『松蔭日記』」 | 上野洋三 |
| 第二章 | 漢文学「江戸漢詩文壇の胎動」 | 大庭卓也 |
| 第三章 | 俳諧文学「芭蕉の「閑」」 | 深沢眞二 |
| 第四章 | 散文文学「西鶴と物真似」 | 西田耕三 |
| 第五章 | 説話文学「近世説話の位相」 | 後小路薫 |
| 第六章 | 劇文学「元禄演劇の技法」 | 岩井眞實 |
| 第七章 | 和学「閑寿の徒然草学」 | 川平敏文 |
| 第八章 | 漢学「儒仏論のはてに」 | 宮崎修多 |
| 第九章 | 言語・辞書「元禄の辞書」 | 岡島昭浩 |
| 第十章 | 出版・情報「元禄の出版文化」 | 市古夏生 |

巻末付録 元禄文学研究文献目録・同略年表 勝又基
書名の通り、本書は初学者を対象に編まれたものであるが、それにとどまらず、研究史に新たな展開を促そうとする意欲作とも言えよう。

(平成十三年四月 世界思想社 B6判 二八二頁 一、二〇〇円)